RUNNER OF 800-METER

NSK1121

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＵＮＮＥＲ　ＯＦ　８００－ＭＥＴＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ３７４６Ｗ

【作者名】
ＮＳＫ１１２１

【あらすじ】
いや、俺は中学行ったら超グータラ生活するから。
部活なんて。まして、走りまくるだけの陸上部なんてつまんねぇだけだろ？
こうして俺の陸上人生は始まった。

第０ＬＡＰ－プロローグ－

中学校の入学式。

恐らく毎年ほぼ同じ内容を語るであろう校長の話。
中学入試で成績の良かった奴の無駄に固い言葉を使った演説。
ＰＴＡ会長の詰まらなく長ったらしい話。

つまんねー。暇だ。
母親は隣で糞真面目に頷きながら話を聞いてる。
俺が来た学校はそこそこ勉強ができないと入れない、中々競争率の高い学校だ。
それ故、周りには数えるほどしか友人は居ないし、居ても何席も離れたところに居る。

暇。暇過ぎる。
本当それに尽きる。
何時間も席に座ってると背中と腰の間辺りがそわそわしてきて我慢できなくなってくる。

早く終われ早く終われ早く終われ……
それだけ念じていたら以外に　―大体体感時間は８時間ほど―　で終わったよ。
うん、学校一日分に相当してすげー楽チンだったね。
うん、うん……

・　・

体育館での入学式が終わるとそのまま玄関まで上級生が並んで作った新入生の道ができる。

何でわざわざこんな面倒くさいことをするんだろう。
そう考えていると看板や画用紙を持った上級生が駆け寄ってくる。

ああ、なるほど、部員勧誘ね。
ご苦労さん。

でも、俺はそんな一生懸命汗水垂らして血の滲むような練習して試合でて全国大会目指す、なんてダルいことはする気ないから。
皆が死ぬ気で練習してる間は、ゲーセン行って悪友と色々悪いことしてみたり、グータラしてるから。
もしくは、親のことを想い超勉強するから。難関高校行っちゃうよ。

そう思ってたんだけどなぁ……

その時、一際目に付いた看板。
「来たれ、陸上競技部員！」の黒に赤く縁取られた飾りっ気のない文字がすげー印象に残ってる。

第０ＬＡＰ－プロローグ－（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第1LAP－決心－

入学式を終えた俺、藤龍也（ふじりゅうや）は校門近くをうろついていた。
別に用事があるわけじゃないんだぜ。
親が入学説明会だかなんだかで体育館に行ったきり。
親は学校見学してくればとか言って放置プレイしやがるし……
俺んちは山の麓の方にあってこの学校から結構離れてるから親の車で来てんの。
だから、歩いては帰れないから、親の入学説明会だかが終わるまでの間時間を潰さなきゃなんないの。

周りの新入生は校門を抜けて帰って行く。
家近いのかな？いいなぁ。

そんな具合に心の中で愚痴ってたら、突然背中を強く押された。
全く予期してなかったことだから俺はアッって妙に甲高い声を上げて地面に突っ伏しちゃった。
んで、周りで俺みたいにうろちょろしてた他の新入生たちは皆俺のほうを見てニヤニヤするわけ。
あ、カワイイ女子もこっち見てクスクスやってる。

あー恥ずかしい。誰だよ俺の背中ド突いたの。
若干イラつきつつ後ろを見る。
なんか見慣れてるニヤケ顔。

「ユウ！テメェ！」
って言ってド突かれた奴に肩パンを繰り出す。
まあ本気じゃない。ある程度加減してだ。

「よう、リュウ！なんか湿気た面してるから気合入れてやったんだよ」
なんてド突いた奴は言う。

こいつは荒澤祐樹（あらさわ ゆうき）。
俺と同じ小学校から上がってきた数少ない親友。
小学校時代は野球部のバッテリーを組んでた。
俺が投手（ピッチャー）、ユウが捕手（キャッチャー）。
実は幼稚園時代から一緒だったりする。
『ユウ』ってのはこいつのニックネーム。『リュウ』は俺のね。

ちなみにこいつの家と俺の家は３０メートルも離れてない。隣の隣の隣の家。

「お前今暇？俺親が説明会言っててさ～」
ハイ、仲間発見。

「おう、俺お前と同じ境遇だし。」
「よっしゃ！じゃあグラウンド行こうぜ。野球部見に行くべし」

はぁ～、こいつ野球続けんのかよ。
熱血ですな。

「え～、めんどい。行っても俺部活はいんないもん」
「いいじゃん、どうせ暇なんだから付き合えって！」

ってな具合でハイスピード＆強制的にグラウンドへ。

・　・　・

「「「「ヘイ！バッチコ～イ！！」」」」
なんて掛け声とともに軟球の打たれる鈍い音。
この音聞くだけでダルい。

「やっぱ中学は気合はいってんなぁ！」
うわ、ユウのやつ目ぇきらきらさせちゃってるよ。
こいつの熱血地味たとこ、嫌いだわぁ。

「んじゃ、またここで俺たちユーリューバッテリーの力見せ付けちゃいます？！」
「ハァ？だからやんないって」
「ちぇっ！あわよくば引き込もうと思ってたのに……」

ユーリューバッテリーってのは小学校のとき他校の選手から呼ばれてたあだ名だ。
俺たち結構強かったからね。俺球速かったし。こいつ打ちまくってたし。

でも野球は好きだけどする気はない。
それだけは恐らく、この世界から野球以外のものが消え失せた時以外変わらないだろう。

「あ～、でもお前が野球やんないんならなぁ～」
実はこいつ、小学校のときも俺について来て野球を始めた。
俺がピッチャーやるって言ったらこいつがキャッチャーやるって言った。
こいつはいっつも俺について来てるんだよね。

「じゃあ、もう行こうぜ。リュウがはいんねーんだったら俺もいーや」
２人で校門への道をやや早足で進む。

その時、野球グラウンドの隣にある陸上トラックが視界に入った。
早足だった歩行が、ゆっくりと、止まる。
なんか、眼を奪われちゃった。

なんかストレートのコースを猛スピードで駆け抜ける人たちがいる。

―

トラックをグルグル、ずっと回り続けてる人たちがいる。

―

回り続けている人たちの足の裏に付いているピンが土のトラックを踏み込み、その土を跳ね上げる。

―

あれ？あの人、回ってる人たちの中で一際速い。

―

何周も走り続けてんのにペース落ちねーし、それどころかどんどん伸びていく。

―

かっけぇ・・・

俺が足を止めたのに気づきユウが声を掛けた。

「どした？」

決まった。

「決まった」

ユウが問う。

「何が？」

俺さ。

「俺さ」

「陸上やる！！」

第1LAP－決心－（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第２ＬＡＰ－試走－（前書き）

文章は作者が変更するべきと判断した場合、突然変更されることがあります。
変更するといっても些細な部分なのでご安心ください。
物語の主要な部分の変更はありません。（たぶん。）

第2LAP－試走－

「ハァ？」

あー、やっぱしこうなるわな。うん、大体想像ついてたけど。
約5分前に前からやってた野球部をきっぱし断ったのに、初見の陸上やるとか言ったらね。
頭おかしいとか思われたりして。

でもね。
俺はやるって言ったら絶対やる人だから。
絶対やる。

「お前部活入んないっていったじゃん。やるんなら野球しようぜ」
こいつしつけえなあ。

「いんや、俺は陸上やる。陸上部見たらときめいちゃったもの」

なんて言ってやったらユウの奴、一瞬金剛力士像みたいな顔したと思いきや呆れた表情になった。
いーですよーだ。俺はなんと言われようと絶対やりますもん。

結局その日はそのまんま帰った。
陸上部見てっても良かったけどユウの表情がね。
で、その本人はすんげー呆れて、若干怒ってプンスカ帰った。

親には陸上部入る、って真面目な顔して言ってみたら、「ふーん、頑張って」って返された。

いや、折角緊張しつつ打ち明けたんだからもっとまともな返事しろや！って思ったけど一応許可は貰えたから言わなかった。

・　・　・

その夜のこと。

陸上部入るって言ってみたものの、さっきまで考えてもいなかったから全然自信ない。
野球部ではピッチャーだったからよくユウとか他のピッチャーたちと走ってたけど走ることを主題として走ってなかったからね。
やっぱり走ってみるべきかなあ……

その後、目覚まし時計の針を合わせて眠りについた。

・　・　・

早朝午前5時。
とりあえず家にあったランニングシューズを履いて、ウインドブレーカーを着て、軽く準備運動　―町内をゆっくり一周して基本的な準備運動―　をした。
やっぱし4月の始めはまだ寒いわ。

眠かったけどなんか直ぐに目が冴えた。
適当に履いたランニングシューズだったけど野球のスパイクよりはだいぶ軽かった。足がよく上がる。

今はどんだけ走れるのか自分でもわかんない。今日は様子見。
なんか野球の試合前みたいにドキドキするよ。
自分の実力を知るって中々緊張するね。

そろそろ始めますか。
コンクリートの道路に引かれた、何十年も引き直されることのなかったであろう、掠れた『止まれ』の白線を踏み、立った状態(スタンディング)で片足(ス)を前(タートの)に踏み出す形を取る。

「よういー……」
息を吸い込み、肺に酸素を取り入れた。
これでバッチシだね。

さあスタートだ。
「ドン！！」

俺は勢いよく踏み出した。

第２ＬＡＰ－試走－（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3746w/

RUNNER OF 800-METER

2011年10月9日16時07分発行